

する責任がある。そのこともこの秋の取組みに深く関わっている。

9月には、労福協の欧州調査でモンドラゴン視察が組まれている。現地では日本の視察団の評判が悪いと聞いていたが、今回は1日半の視察を積極的に受け入れてもらった。モンドラゴンのその後を学びつつ、日本発の協同労働もぜひ伝え交流を深め合

いたい。

「核なき世界」への転機を予感させた今夏。日本の政治も転機が生まれるのか。多くは国民の主体性・当時者性にかかっている。自身も組織も大きな転機をつくり出す秋へ。その先には、未来を見据えた新生「協同を拓く全国集会 in 四国」が待っている。

目録 研究所だより

榎本 木綿

立秋過ぎていまだ暑さは暮るばかりです。各地で連日30℃を超える暑さが続く一方、南半球では厳しい冬の寒波のなか記録的な大雪に見舞われた地域もあるそうです。毎年のように「今年は異常気象だ」と言われ続け、平均気温の上昇やその主原因がCO₂にあることもわかりながら、さていったいいつになったら私たちは真っ向から環境問題に向き合うのでしょうか。

先日、協同総研理事の菊間満先生と小川三四郎先生、早尻正宏先生が中心となり開催された山形大学農学部主催シンポジウム「森林・林業政策の転換 ～産業から地域へ～」に伺ってきました。森林組合、農協、労協からそれぞれパネリストが出され、林野行政が推進してきた大規模経営の拡大政策を踏まえつつ、今後いかに中山間地域で仕事と暮らしを持続させていくのかその解決についてそれぞれの立場から報告がなされました。

各協同組合ともにそれぞれのミッションのもと有意義な提起がされましたが、一方

で行政の縦割り同様、協同組合間の連携のむずかしさも感じられました。小さくとも、こうしたシンポジウムを契機に、新しい協同の芽が芽吹くことが期待されます。

労協連からは古谷副理事長が登壇され、「協同労働による仕事おこしの可能性」についてお話になり、「半X(=天職)半ワーカーズ」といった提起がされました。既にこの「半農半ワーカーズ」で取り組んでこられたのが白鷹町で活躍する「しらたかノラの会」です。同じ山形県ということもあり、今回、鶴岡から置賜へ少し足を伸ばしてきました。

「しらたかノラの会」の皆さんとは一昨年の新潟での協同集会を機に交流してきました。11名のメンバーのうち、半数が地元、半数がIターンという割合で結成しており、今年で5年目です。個々人が白鷹町で有機農業を稼業としており、同時にノラの会を通じて協同で共同畑(メンバーかその知り合いからの借地)を管理し、農産物の加工・製造・販売を行っています。皆で出